白石小学校だより

山口市立白石小学校
第１１号
２０１９.3.1発行

縁　を　生　か　す

その先生が５年生の担任になった時、不潔でだらしなく、どうしても好きになれない少年がいた。先生は少年の悪いところばかりが目に入るようになっていた。

ある時小１の記録に目がとまる、

小１：朗らかで友だちにも親切。勉強もよくでき将来が楽しみ。（まちがえだろう）小２：母親が病気で世話のため時々学校を遅れる。小３：母親の病状が悪化、疲れており教室で居眠り。後半母死亡、悲しんでいる。小４：父は生きる希望を失い、アルコール依存症、子どもに暴力をふるう。

先生の胸に激しい痛みが走った。悲しみの中を生き抜いている生身の人間として、先生が目を開かれた瞬間であった。放課後先生は声をかけた。

「夕方まで先生、教室で仕事をするから、一緒に勉強しない？」

少年は初めて小さな笑顔を見せた。しばらくして少年は初めて授業で手を上げる。先生に大きな喜びがわきおこった。その年のクリスマス、少年が小さな香水のビンをくれた。亡くなったお母さんの使っていたものに違いない…、一滴つけ夕方少年の家にいった。

「あっお母さんのにおいだ。今日はすてきなクリスマスだ」少年は叫んだ。

それから、先生は少年の担任ではなくなった。

卒業のとき、一枚のカードが届いた。

『先生はぼくのお母さんのようです。今まで出会った中で、一番すばらしい先生でした』

それから６年。また、カードが届いた。『明日は高校の卒業式です。ぼくは５年生で先生に担任してもらって幸せでした。おかげで奨学金をもらって、医学部に進学できます』

そして１０年を経て、また、カードがきた。そこには先生に出会えたことへの感謝と父親にたたかれた経験があるから患者の痛みの分かる医者になれると記され、こうしめくくられていた。

「ぼくはよく５年生のときの先生を思い出します。あのままだめになってしまうぼくを救ってくださった先生を神様のように感じます。大人になり、医者になったぼくにとって最高の先生は、５年生のときに担任してくださった先生です」そしてまた１年。届いたカードは結婚式の招待状だった。『母の席に座ってください』と一行書き添えられていた。

たった１年間の担任との縁。その縁に無限の光を見い出しそれからの人生を生きた。ここにその少年の素晴らしさがある。**人は誰でも無数の縁の中に生きている。無数の縁に育まれ人生を開花させていく。大事なのは与えられた縁をどう生かすかである。**

小さな人生論　藤尾秀昭(致知出版社(掲載許可))

あちらこちらで紹介されご存知の方もおられると思いますが、「縁を生かす」を紹介させていただきました。平成３０年度が終わり新年度がスタートします。私自身は反省することばかりですが、皆様からいただいている「縁」を大切にする、「縁」を生かせる人間でありたいと願っています。本年度ありがとうございました。

校長　藤　永　靖　彦